
幻の神々

ミイティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻の神々

【ZPDF】

207012

【作者名】

ミイティ

【あらすじ】

第一作目の小説です。

うまくかけてるかわかりませんが見てやつてください

砂の村サンドヴィレッジ

中央都市リエステール。そこは中央都市の名に恥じず、その大きさは南側の街の中では最大規模と言えよう。武器屋、道具屋、能力（魔法を示す）の店に酒場、大規模な屋敷もあり、

聖アルティア教会聖堂^{カテラードール}、住居区など。

そこには、箒やボードで空を飛び交う者たちが多く居た。また、自警団^{ナイト}も数多く駐屯し、平和な街である。

そんな中、魔物の討伐依頼を頼まれたあるギルドに所属する者達が旅立つ準備をしていた

「燃焼薬と石化薬、それとスライム破裂薬をください」

ある店の前で、弓と矢筒を肩にかけてある少女が買い物していた。「まったく、やっと旅立てるのか。雑魚相手にそんな準備することあねえだろうによ」

後ろからひょこっと現れた、腰に剣を差してある男がいった。

「射手^{スナイバ}は矢がいるから必然的に依頼前は買い物が必要なの！」

少女は、会計を済ましながら後ろの男に反論をいった。

「ふうん」

男は関心なさげに他の店を見ながら返答を返した。

視線の先には、黄の髪に赤い瞳、ゴスロリの服の美人が居た。

「まったく、これだから男は……」

男を白眼で睨みながらぼそつと呟いた。

「ほら、いくよ！」

男の服をつかみ、道に沿つてズンズンと歩いていった。

「離せよ！ 自分で歩くからよ！」「

男がそう言つと、少女はその手を離した。

「歩いていくと時間かかるし飛ぶ？」

「ああ。そのほうがずっと楽だろ」

少女は男の承諾を得ると、右手首に装着してあるブレスレットの宝石部分を地面に向けた。

それに続くように、男もだ。

「エアロボード！」「エアロブルーム！」

二人は名称が違う言葉を言うと、ブレスレットからは光が放たれ、どこからともなくボードと笄が現れた。

二人はそれぞれ自分の飛行道具をつかんだ。男はボードを。少女は笄を。

そして二人はそれに乗ると、上空へとものすじにスピードで飛び立つた。元居た場所には砂埃が舞い、そこにいた人達は目を押さえながら咳せきをしていた。

”ビュン”

「おい！何でお前の笄はそんなにはえんだよ！」

「へつへん、あなたのボードと違つて安物じゃなへブツ！」

「ざまあみろ！俺はお前と違つて安物の笄じやねえから、小回りが利くんだよ」

男は、樹に激突した少女に向かつて言った。

「なんですつてえ！」

後ろから追いついた笄乗りの少女は、弓を構えていた。

「お、おい！落ちつけ！」

必死に男は止めたが、時は遅く、数本の矢が放たれていた。

「なんですよけるのよ！」

少女は、頬を膨らませて言った。

「はん、ボードは小回りが利くんだよ！」

「きい～！」

少女は、猿のような奇声を上げて男を抜き、どんどん先に行つた。

「あっ、おい！」

男は必死においつこうとしたが、箒の速度にはおいつかず……。

「やつと止まつたか！」

ある村の上で、少女は止まっていた。

「遅い遅い！ ここだよここ！」

すっかり機嫌を直し、いつも通り元気に振舞っていた。

二人は迷惑をかけないようゆっくりと地上に降りた。

「ここか、砂の村『サンドヴィレッジ』は」

二人はそれぞれの飛行道具に指輪を向け、

光が発せられると飛行道具は吸い込まれるように消えていった。

「さて、どうす

「よくぞいらしてくれました」

男の声を遮り、後ろから老いたおじさんが話しかけてきた。

「ここ」の長老ですぞ。そんな警戒しなくともよろしい

長老が言つたとおり、二人は弓と刀に手を当てていた。

二人は、安心したようで手を離したが、多少警戒している。

「詠唱発動準備なぞせんでよいぞ。そこまで疑われていると、笑う

しかないの。ホオツホオツホオツ」

「……よく分かつたねおじさん！」

「ところで、君たちの名前はなんというのじゃ？」

おじさんは一人の目を数秒ずつみて聞いた。

「あつ、あたしの名前はヴェロニカ・ビリアツツイ。通称ベリー！」

「俺はクローディア・プレスコット。通称いるのか？ 通称はクロウだ」

二人は普通どおり名乗つたが、長老は目を大きくして固まっていた。

「き……君たちは……あのギルドの……？」

「うん、あたしたち『Pantheon of phantom』
幻の神々』に所属しているの」

「ああ、俺たち『Pantheon of phantom』『幻の
神々』に所属している」

二人の声がはもつた。

「おお……それなら安心して頼めるわい」

長老は、血漫の髪を撫でながら言った。

「氣をつけてじっくりくるんじやん」

「やねるよー」 「ああ」

やつひつて一人は踵を返して反対方向へと歩き出した。

「ふうん、町から近いってのにモンスターがうじゅうじゅういるね
ううん、このままだと町を襲うかもなあ……」

「じゃ、狩る狩る！」

「いや、ペットの可能性が……」

”ズシュツ”

二人が雑談をしていると、突如『何か』を引き裂く音がした。

「痛つ」

『何か』とは、クロウの服や皮膚だった。

”ヒュン”

クロウの背後から放たれた矢は、クロウを襲ったモンスターの頭を貫いた。

「こんなミイラ男、『グロリム』にやられるなんて不覚だな」

「ほり、そんな咳いてる暇があつたらグロリムの大群から離れなよ！」

ベリーは、クロウに注意を促した。それに呼応するようにクロウはグロリムの大群から離れた。

「こんな臭えやつがペットなわけねえか！ 依頼にはねえが潰しどくぞ！」

そう、グロリムは臭いのだ。死体が動いているのと同じよつのので、腐臭がする。

グロリムの単体ならともかく、大群はきつい。これはグロリムだけではなく、他のモンスター全ても同じだ。

残念ながら、クロウ達の前にはグロリムの大群が……。

「めんどくせえが嘆いてても仕方ねえかつ！」

そう言つてクロウは腰の刀へと手を当て、横から迫つてくるグロリムに対し、抜刀で腹を切り裂いた。

「援護するからつっこみな！」

「ああ！」

ベリーの言葉に返答すると、グロリムの大群へと橋つて言った。

「はああ！」

闘志を燃やして突っ込み、無茶苦茶な刀技でどんどん真ん中へと向かっていった。

「おつと！」

向こうもただやられるわけではなく、グロリムが攻撃をしてくるところをベリーが矢で射る。

「くそつ、どんどんだけいるんだよ！」

一人がどんどんグロリムをなぎ倒してるともかかわらず、まったく減る気配がない。

その時だった。

「ファイアボール！」

魔法名が誰かの口から発せられると、突如グロリムの大群の中から複数の火柱が巻き上がっていた。

「だ、誰だよ危ねえなあ！」

グロリムの苦痛の叫びにまじり、クロウはそう呟いていた。
「随分と苦戦してるようね」

クロウの目の前には、突如女が現れた。

「ママママスター！？」「ギルドマスター！？」

いつのまにか火柱によってできた隙間をくぐりぬけてきたベリーがいた。

「マスター、何故ここに？」

「マスターなんてよしなさいよ。いつも通りでいいわよ？ つと、そんなことより先にグロリムを掃除するわよ」

そう言って突如現れた女は、いきなり消えたと思いつきや、空中にいた。『テレポート』だ。

そして空中浮遊の魔術、『レビテーション』で浮いていた。

「どうしておかんと巻き添えを食つぞ？」

女はそう注意を促すと、クロウとベリーは慌ててグロリムの大群か

ら飛び出した。

「すべての力の源よ 輝き燃える紅き炎よ 盟約の言葉によりて
我が手に集いて力となれ！ ブラストボム！」
女の上にはファイアボールを遙かに上回る大きさの火球がいくつも
現れ、

着弾すると同時に耳の鼓膜が破れるかと思つくらいの爆音を発した。
魔法によつて起きた土埃など視界を遮るものが消えると、火球が着
弾した地面は溶岩のように赤く煮沸していた。
そこにはグロリムの骨さえも残つていなかつた。

「で、マスターは何故ここに？」

クロウは、目の前にテレポートしてきた女に問いかけた。

「マスターなんて呼ばなくて、いつも通りにエミィでいいわよ」

「じゃあエミィ、なんでここにいるんだ？」

「私が受けていた依頼が終わつて、エアロブルームで帰つていたら
あんた達が居たといふことよ」

「じゃあさ、エミィもあたしたちの依頼手伝つてよー！」

「何の依頼か知らないけど、良いわよ」

「ありがとー！」「助かるぜ」

そんな雑談を交わしているうちに、目的地へとついた。

「俺実はここ来たことがあるん」

「あたしここ初めてきたーーー！」

クロウの発言は、ベリーの発言によつて搔き消された。

三人は古墳の形をした『砂上墓所』の中へ入ろうとしたが……。

「おい！ 現在は無断な進入は禁止されている！ 長老に許可をも
らつてから」

一人の槍をもつた門番の言葉を、もう一人の門番が搔き消した。

「あつ、あ、あ、あなたは……エミリア・エルクリオ……さん！？」

「ああ、そうですけど……？」

門番がいった『エミリア・エルクリオ』とは、『エミィ』のことである。

門番の一人は耳打ちをはじめた。

終わったと思えば、二人は微笑みながら快く通してくれた。

「なんだつたんだ〜？」

ベリーは歩きながら後ろを振り向いて門番を見て言った。

「おいベリー、既に砂上墓所に入ってるんだぞ？ そんな悠長に構えてたら、一瞬に餌になるぞ」

「大丈夫だよ。だつてエミイがいるんだしさ」

「ほら、雑談してるうちに地獄からの誘いがきたわよ？」

エミイの言葉に即座に耳を傾けたクロウは、相手の数を確認した。「グロリムが数十体、スライムが数十体の大群か」クロウは、モンスターの種類と数を的確に言った。

「さすが、瞬間記憶能力は伊達じやないね！」

ベリーはそういうながらクロウの肩を叩いた。

モンスターなど目に入つてないようだ。

「言つておくけど、私はあんまり加勢できないよ？ あまり強い魔法を使つたら古墳が崩れるからさ」

「ええ〜！？」「え〜！？」

「いや、でも初步魔法程度でなら援護できるからさ、突つ込んで良いよ！」

エミイの声に呼応して、クロウは突つ込んでいった。

「うおおおおお！」

「あんまり強力な技は使うでないぞー」

今にも古墳を崩壊させそうなクロウに、エミイは注意を促した。

”ヒュン”

エミイとクロウの頬を数本の矢が遮り、見事、スライムとグロリムを貫いた。

「ああ、もう！ めんどくさい！」

そう言つて、ベリーはモンスターの大群へと突つ込んでいた。普通の弓を扱う職業のやつらは、モンスターの大群に突つ込んでいくのは自殺行為だ。

だが、ベリーは違つ。

弓の両端、つまり下関板しもせきいたと上関板うわせきいたの部分に、刃がついているのだ。弓を回転させ、チャクラムのように扱つてどんどん切り裂いていく。威力は低いが、機動性に優れている。スライムなどの雑魚相手などには、とても有効だ。

二人が大群に入つていくのを見終わると、エミィは地面に自慢の杖、

『サンタマリア』をモンスターの大群にむけて詠唱を開始した。

「氷結せし刃、鋭く空を駆け抜ける！ ダストチップ！」

杖の先端から少し離れたところに魔方陣が展開され、魔方陣からは氷で造形された鋭利な小さい針が大量に放たれた。

放たれた氷の針は、全てモンスターの目に直撃した。

「今のうちに！」

「おうー！」「うん！」

針がささつて目が見えなくなつたモンスターたちは、持つている武器を投げ捨てて目を押さえている。

目に針がささつたモンスターだけを、ベリーとクロウは次々と倒していった。

「空と大地を渡りしものよ 優しき流れ 漂う水よ 我が手に集いて力となれ！ フリーズ・アロー！」

詠唱と魔法名を言い終わると、エミィの後ろには大量の氷の矢が現れた。

そして氷の矢は、モンスター達の様々な場所を貫いた。

「めんどくせえ！ 一気にけりつける！」

エミイの方を一瞬だけ振り向いてそう言つた。

「ベリー！ 今だけ俺のまわりを頼む！」

そう言つてクロウは、刀を地面に突き立てて目を閉じた。

「……天剣招雷！」

沈黙したクロウの口から放たれた言葉によつて、刀はチリチリという音を立ててゐる。電流が流れているのだ。

「陰の流れ 五の太刀・閃光雷撃砲！」

再び口から発せられた言葉により、刀身に纏わりついていた電流は、激しく音を立てて拡散し、前方の敵を燃やした。

「陰の流れ 七の太刀 無風！」

クロウはそう言つと、刀を鞘にしまつた。

”ズシュツ”

突然、全てのモンスターのあらゆる部位が断たれた。

「さっすがあクロウ！ おかげでメンタルを使わないですねんだよ…」ベリーが口にしたメンタルとは、MP、つまり魔力のことである。「おかげさまで俺は体力が随分減つたぜ。エミィ、回復を頼む」クロウがそう言つと、エミィが目の前にテレポートしてきた。

「聖魔法や光魔法はあんまり得意ではないんだけど……」

「大丈夫だよエミィなら！」

ベリーから応援を受けたエミィは微笑んでから、目をゆっくりと閉じて詠唱を開始した。

「聖なる癒しの御手よ 母なる大地の息吹よ 願わくば我が前に横たわりしこのものを

その大いなる慈悲にて救い給え リザレクション！」

エミィの杖、サンタマリアからは魔方陣が展開され、魔方陣から光の蔓のようなものが現れ、ゆっくりとクロウを包み込んでいった。

「体力が回復してるのが分かるな」

「これでどんな敵がきても大丈夫だ」体力が回復したクロウは立ち上がった。

”ミシミシミシ”

何かが音を立てる同時に、足元が膨れ上がった。

「な……なんだ!?」

「離れて！」

エミィが慌てて二人に退くように言つと、二人は即座に反応して退き、今もなお膨れ続けている地面を黙視していた。

”ドツ”

地面の膨れ上がりは、弾けて当たりには地面の破片が飛びかつた。
「吹き過ぐ風よ 精靈達よ 我が手に集いて力となれ！ ウィンド
ブリット！」

杖の先端からは何かが放たれると同時に、こちらに向かってきた破片が崩れた。『衝撃波』だ。

ひと段落ついた三人は、地面が膨れ上がつたところを黙視した。

「白い…うなぎ…？」

沈黙を破つて第一声を発したのは、ベリーだった。

「これが依頼にあつたエル・ドラグーンか……？」

「敵の名前なんかどうでもいい！」

ベリーはそう言って矢を構え、エル目掛けて矢を放つた。

”ヌルツ”

放たれた矢はエルに当たつたが、何故か矢は刺さらなかつた。

「そんな！？」「なにつ！？」

『エル・ドラグーン……鱗は無く、全身がぬるぬるした粘液で覆われている手足や翼の無いウナギのような竜。エルの体に纏わりついでいるヌルヌルする液体は、矢や刃などの鋭利な攻撃を無効化する

ベリーとクロウがパニックになつて焦つている中、エミイだけは冷静に相手のモンスターの把握をしていた。

『粘液の下の皮膚の色は砂上墓所などの涼しい場所では青白い色になり、暑い砂漠では赤色に変わるという不思議な性質を持ち死ぬと真っ白になる。この竜が放つブレスも皮膚と同じ様に場所によって変わり、涼しい場所では冷氣を帯びた光線を、暑い砂漠では焼けつくような熱線を放つ。だとしたらここでは冷氣を帯びた光線を扱う……』

エミイの把握を聞いていたかのように先ほどまでじつとしていたエルが、把握が終わると同時にエミイ目掛けて流れるように滑走してきた。

「俺たちを無視してエミイを狙うなんて、100年はえーよー！」喋りながらエミイの前方に出たクロウは、刀を構えて攻撃を防ごうとしていた。

エルはクロウの前までくると、鋭い牙で食らいつこうとしたが、体の内部には当然ぬるぬるはなく、牙はなんなく防げた。

”ヒュオオオオ”

「な、なんだ？ 急に寒くなつてきたぞ……？」

「冷気を帯びた光線、ネイチャーブレスを放つ氣だ！ 離れて！」

即座に気づいたエミイが注意を促したが、クロウの頭では理解できていないと様子……。

「我が前に立ちふさがる愚かなる者に、我が内面の世界で無限の地獄を見せん！ イリュージョン！」

エミイが魔法を発動したが、魔方陣は展開されず……。

「今のうちに離れて！」

一度目の注意で、クロウは反応して即座に飛びのいた。

「おい、何をしたんだ？ 突然動きが止まつたが……」

「精神に直接働きかける魔術によつて、今のあいつには幻の茨じばらが絡みついてるよう見えて、それを本物と認識しどのじや。今のうちに作戦を立てるのじや！ いくぞ！」

エルから三人は距離をとるために走った。

「先にいつておけ！ 幻術を突破されたときのことも考えて壁を作つておくから！」

命令を聞いた残りの一人は、そのまま走つていった。

「母なる大地よ 我が前に出で 万槍を弾く盾となれ！ アーシー ウオール！」

エミィの少し前の足元には魔方陣が現れ、とたんに土が膨れ上がり、土の壁となつた。

土壁の造形が終わると、一人においつくべくエミィは走つた。

「体力的にはあやつらのほうが高いから、追いつけないわね……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0701n/>

幻の神々

2010年10月15日21時59分発行